

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2011年 4月 25日

派遣者氏名（専門分野）	鈴木暁世（文化表現論・国文学東洋文学講座・比較文学）
-------------	----------------------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	イエイツにおける日本の戯曲の受容について—郡虎彦と菊池寛を中心に—
-------	-----------------------------------

派遣期間

2011年 1月 30日 ～ 2011年 3月 30日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	アイルランド	ゴールウェイ	アイルランド国立大学ゴールウェイ校	ライオネル・ピルキントン教授
	アイルランド	ダブリン	アイルランド国立図書館	ホノラ・ホール氏

派遣先で実施した研究内容

- A) アイルランド国立図書館貴重資料 Joseph Holloway Collection の全体調査、図書館司書ホノラ・ホール氏（Joseph Holloway Collection）の協力のもと派遣者の研究対象である Dublin Drama League のパンフレットを全て複写した。
- B) アイルランド国立大学ゴールウェイ校ライオネル・ピルキントン教授に指導を受け、W. B. イェイツ（William Butler Yeats, 1865 - 1939）における 1920 年代の仕事についての知識伝授。特に、菊池寛「屋上の狂人」（*The Housetop Madman*）が Dublin Drama League において上演された 1926 年から翌 1927 年の Dublin Drama League の活動の位置づけについて重要な意見を賜った。また同教授から、アイルランド近代演劇研究の世界的拠点である同大学の James Hardiman Library 特別コレクション及び貴重書コレクションの使用許可を得、*The Irish Satetsman*, *The Irish Times*, *The Leader*, *The Irish Independent*, *The Irish Press*, *The Dublin Magazine* 等の新聞・文芸雑誌の 1910 年代から 1920 年代のマイクロフィルムの包括的調査を行い、トリニティ・カレッジ図書館において資料を補完した。その結果、菊池寛 *The Housetop Madman* のアイルランドにおける劇評を新たに発見した。
- C) アイルランド国立図書館アヴィス=クレア・マクガバン氏（Department of Manuscripts）の協力のもとアート・オマーナン（Art O'Murnaghan, 1872 - 1954）の旧蔵書、新聞・雑誌切抜き、書簡、刊行計画書、案内状、ポスター及び広告、設立趣意書等の資料の閲覧、複写、整理、分析（Joseph McGarrity Papers, Mathew O'Mahony Papers）を行った。さらにアニータ・ジョイス氏（Prints and Drawings Department）の協力のもと同作家のマニュスクリプト、ノート、メモ等の資料の閲覧、複写、整理、分析（Thom Collection, O'Kelley Collection）を行った。
- D) アイルランド国立図書館で開催中の Yeats: The Life and Works of William Butler Yeats 展

(2008-2011)の担当司書ビリー・ケンリック氏からイエイツと日本の能との関連に関する知識伝授。*The Only Jealousy of Emer*の仮面2点、*At the Hawk's Well*の仮面2点及の撮影許可を得た。イエイツ記念館(スライゴ)にてイエイツ戯曲の上演に際して使用された仮面資料の補完を行い、イエイツと日本の能との関連に関する調査を行った。

- E) アイルランド・ナショナル・ミュージアムにおいて、菊池寛の*The Housetop Madman*の上演パンフレットの表紙画を描いたハリー・クラーク(Harry Clarke, 1889 - 1931)の調査。ハリー・クラークと共に、アイルランドにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動及び演劇運動に関わったアート・オマーナン『復活の書』について、主任キュレーターのマイケル・ケニー氏から知識を伝授された。
- F) チェスター・ビーティー・ライブラリー日本関係資料調査、Powerscourt House and Gardensの日本庭園を視察。

## 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

### 【研究の目的・計画】

本研究の主たる目的は、W. B. イエイツ(William Butler Yeats, 1865 - 1939)を中心とした近代アイルランド文学における日本文学・文化の影響を、当時の上演記録や新聞・雑誌の調査によって具体的に明らかにすることである。19世紀後半、アイルランドにおいて独立運動の気運が高まると、日本においても関連記事が数多く執筆され、イエイツやJ. M. シング(John Millington Synge, 1871 - 1909)らアイルランド文芸復興期の作家の作品が、盛んに翻訳された。いくつかの先行研究が示すように、彼らの戯曲を翻訳した郡虎彦や菊池寛の執筆した初期戯曲には、アイルランド文学の影響が指摘できる。

申請者の博士論文で指摘したように、郡虎彦によって日本文化へと興味を持ったイエイツが、1926年に高く評価したのが菊池寛であった。しかし、菊池寛の場合は、郡とは異なり、英語圏の読者を想定していたわけではない。菊池は、イエイツやシングらのアイルランド文芸復興運動に共感し、アイルランド独自の文化の価値を見直し、復興するという目的で書かれた戯曲に強く感化され、巧みに日本の風俗や文化に翻案することで、たとえば「屋上の狂人」(1916)などの戯曲を執筆したのである。こうした「屋上の狂人」など5作品を英訳した戯曲集*Tojuro's Love and Four Other Plays*(翻訳者 Glenn W. Shaw, 1926)は、同年3月1日の*The Morning Post*紙社説において日本独自の価値観を描き出した作品として高く評価された。イエイツにおける菊池と郡の戯曲の受容は、異文化間における相互影響の興味深い一対の例として比較研究されるべきものであろう。

そこで本研究では、日本文学とアイルランド文学の相互交渉、イエイツにおけるオリエンタリズムの問題を、アイルランド演劇界における郡虎彦と菊池寛の受容という側面から実証的に明らかにしたい。そのためには、当時の新聞・雑誌資料の書評記事や劇場パンフレットの調査が不可欠であるが、こうした資料は日本に所蔵されておらず、アイルランドの機関に収蔵されている文献に直接あたる必要がある。現地では、膨大な当時の新聞・雑誌記事のなかから、郡虎彦戯曲の上演記録、書評記事を調査するとともに、*Tojuro's Love and Four Other Plays*(1926)の書評、*The Housetop Madman*の劇評や回顧記事を出来るだけ多く入手・閲覧し、演出や演技の傍証としても利用しながら、それを作品分析に生かしたい。その際、アイルランド・ナショナル・ライブラリーの大量にある演劇関連貴重コレクションを調査するが、司書とともに整理しながらの調査になる。あわせて効率よい調査のためにも、可能な限り周辺資料の発掘を考慮しており、アイルランドにおける当時のジャポニスムに関係する作品や資料、日本のイメージに関する記事などの収集も予定している。

### 【計画の達成状況、明らかにできた成果】

1) イェイツによる菊池寛受容及び菊池寛 *The Husetop Madman* 上演（原題「屋上の狂人」、アベイ座、1926年11月28日、29日）について、当時の新聞・雑誌を調査した結果、新聞劇評を発掘した。この調査については、アイルランド国立大学ゴールウェイ校ライオネル・ピルキントン教授の指導を受け、菊池寛 *The Husetop Madman* が上演された1926年から翌1927年のDublin Drama Leagueの活動の位置づけについて、*The Irish Statesman, The Irish Times, The Leader, The Irish Independent, The Irish Press, The Dublin Magazine* 等の新聞・文芸雑誌の1910年代から1920年代のマイクロフィルムの包括的調査を行い、菊池寛戯曲がどのように受け止められたのかという上演の背景について考察した。また、並行して、Dublin Drama Leagueの活動を主宰していたイェイツ、グレゴリー夫人(Augusta, Lady Gregory, 1852 - 1932)、レノックス・ロビンソン(Lennox Robinson, 1886 - 1958)の日記、書簡の総合的調査を行い、菊池寛、郡虎彦らをはじめとする日本演劇に関する言及、ジャポニスム演劇に関する言及、日本及び日本人全般に関する言及については、可能な限り網羅出来たと考えられる。

その結果、これまで研究の蓄積がなかった、Dublin Drama Leagueの外国演劇上演活動について、複数の新聞・文芸雑誌において劇評が掲載されていたことを確認し、Dublin Drama Leagueが原則として会員制の外国演劇研究会でありながら、ほとんどの作品の上演時に劇評が主要新聞に掲載されるなど、意欲的かつ注目を集める活動を行っていたことが明らかになった。菊池寛 *The Husetop Madman* についても決して限られた人々だけのための上演というわけではなく、上演後には新聞に好意的な劇評が掲載されるなど注目された演目であったことを確認した。

さらに、菊池寛の戯曲が上演された1926年前後は、イェイツが一たび遠ざかっていた戯曲執筆・上演に再び意欲的になった時期と重なりあう。実際、イェイツの戯曲のうち *At the Hawk's Well*（上演：1924年3月30日、31日）、*The Only Jealousy of Emer*（1926年5月29日）、*The Cat and the Moon*（1926年5月29日）は、アイルランドにおいてDublin Drama Leagueによって上演された。これらの三作品のうち前者二作についてはこれまで先行研究で指摘されているように、イェイツが日本の能に触発されて執筆した“dance plays”であり、最後の作品は狂言の影響が見られる(Sekine and Martin, 1990; 成, 1999; Kato, 2003)。このことは、イェイツにおける日本の芸術への興味が一過性のものでなく、持続するものであったと共に、イェイツ自身の戯曲における能の手法の深化が、Dublin Drama Leagueにおける菊池寛戯曲の上演を実現させた背景にあることを指し示している。アイルランドにおける初演となった *At the Hawk's Well* 上演パンフレットには、“At the Hawk's Well a No play by W. B. Yeats, First Performance in Ireland”と記述されており、Dublin Drama Leagueがイェイツにとって実験的な新作戯曲を上演する場であったことが明らかである。今回の調査では、アイルランド国立図書館において開催中の「イェイツ展」(Yeats: The Life and Works of William Butler Yeats) 担当司書ビリー・ケンリック氏及びイェイツ記念館の協力を得て、*At the Hawk's Well* 及び *The Only Jealousy of Emer* の上演時にイェイツの意向を受けて制作された仮面4点を撮影することが出来たが、この仮面の造形にも能の仮面の影響が指摘できる。新たに発見した菊池寛戯曲の劇評や回顧記事と合わせ、これらの成果は、演出や演技の傍証としても利用しながら作品分析に生かしたい。

2) 郡虎彦の *Kanawa: The Incantation* (1917) 及び *The Toils of Yoshitomo* (1922) の上演記録、書評記事については、今回のアイルランドにおける新聞・雑誌調査において、*The Morning Post* に前者の劇評を確認した。後者については、アイルランドの新聞のロンドン演劇通信欄において郡の *The Toils of Yoshitomo* の次にリトル・シアターで上演された作品の劇評は掲載されていたもの、郡の作品に対する劇評は見受けられなかった。ただし、新聞・雑誌調査において、毎週ロンドン演劇通信が新聞に掲載されるなど、1910年代後半から1920年代のアイルランドの演劇界において、ロンドンの演劇の影響力の大きさを確認できた。菊池寛の英訳戯曲集の書評と郡虎彦の劇評は共に *The Morning Post* に掲載されているが、グレゴリー夫人の

日記に、アイルランド国立図書館を訪れ、同紙のコピーを取ってイエイツと回覧したという記述があるほか、同紙の劇評について注目して読んでいたことの方がえる記述が複数あることから、当時影響力を持っていた媒体であることが明らかとなった。イエイツとグレゴリー夫人は *The Morning Post* を通して菊池寛を「発見」し、アイルランドにおいて上演したと言えるだろう。

- 3) アイルランド国立図書館 Joseph Holloway Collection の全体調査によって、Dublin Drama League の上演パンフレットを全て閲覧・複写することが出来た。その中で、菊池寛 *The Housetop Madman* の上演パンフレットの表紙画がアイルランドにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動の中心的人物ハリー・クラーク(Harry Clarke, 1889 - 1931)であることがわかった。ハリー・クラークは菊池寛戯曲以外にも Dublin Drama League のパンフレット表紙を何点か手掛けており、ジャポニズムの影響が指摘されている(Wichmann, 1981; 渡辺, 2000)。また、Dublin Drama League の劇評やイエイツやロビンソンによる演劇評論をほぼ毎号掲載していた *The Dublin Magazine* において、日本・中国関連の記事が見られるほか、同誌の挿絵画家であり Dublin Drama League の趣旨を受け継いで設立されたゲート座の舞台を手掛けたアート・オマーナン (Art O'Murnaghan, 1872 - 1954) の作品にもジャポニズムの影響があることを確認した。この点については、アイルランド・ナショナル・ミュージアムにおいて、主任キュレーターのマイケル・ケニー氏からの知識伝授を受け、ハリー・クラーク、アート・オマーナンが、イエイツの妹達と共にアーツ・アンド・クラフツ運動に参加し、Dublin Drama League とゲート座 (Gate Theatre) を通してイエイツ及び彼の演劇運動に関わっていることなどから、菊池寛をはじめとする日本の芸術・文化の受容が、アイルランドにおける「遅れてきた」ジャポニズムを背景として行われたことを再認識し、今後の研究課題とした。

演劇、文学分野以外にも、チェスター・ビーティー・ライブラリー日本関係資料調査、Powerscourt House and Gardens の日本庭園を視察し、アイルランドにおいては、1910年代から1920年代にジャポニズムの大きな波があったことを確認した。これらのことは、菊池寛の *The Housetop Madman* がアベイ座で上演された時期、パウンドを通じてイエイツが能を受容した時期と重なり合う。その結果イエイツにおける日本演劇受容だけではなく、広くアイルランドにおけるジャポニズムの波があったことが明らかとなった。

### 派遣後の研究発表の予定

論文発表: この調査により複写した菊池寛の上演パンフレット (表紙画: Harry Clarke) を、ナショナルライブラリーの許可を得て、拙稿「J.M. シングを読む菊池寛／菊池寛を読む W.B. イエイツー日本文学とアイルランド文学の相互交渉―」(『比較文学』、第53巻、日本比較文学会、2011) に掲載。

口頭発表: ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館ワークショップ口頭発表 (於・ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館, 2011)

さらに研究テーマを発展させ、National University of Ireland の Centre for Irish Studies や Queen's University の Institute of Irish Studies が開催する国際会議 (毎年)、The International Association for the Study of Irish Literatures 年次大会 (毎年)、国際比較文学会 (3年後開催) 等のいずれかの発表ノミネートを目指して準備を行っている。